

西小笠地区更生保護婦人会時代の諸先輩が残した文章（更婦だより）の抜粋

No	出典 氏名	当時の活動が表現されている文章の抜粋
1	更生保護 婦人会だより 32 号 平成 5 年 12 月 7 日 発行（手書き） 書き手 大東 鈴木喜久	<p>「静岡県・山梨県更生保護婦人会交流会に参加して」</p> <p>小雨降りしきる中をバスにゆられて、9 月 7 日、山梨県甲府保護観察所に向かいました。（中略）甲府保護観察所は全国初の女性所長さんで、とてもお若くてピシピシしておられました。（中略）</p> <p>母の鈴の歌の発祥の地は山梨県、この地で目が見えなくなった人が鈴を作っては皆のお役にたてばということではじまり、母の歌が出来、鈴の音を聞いて再犯しないようにとの願いから、更婦の人が鈴を作って出獄する人に渡しています。</p> <p>“防ごう非行、助けよう立ち直り！”をスローガンに明るい社会にと願い活動しておられる様子に頭が下がりました。</p> <p>これから更婦会員として地域社会の非行防止、青少年の健全育成に、ミニ集会を取り入れて頑張っていきたいと思います。</p>
2	更生保護 婦人会だより 32 号 平成 5 年 12 月 7 日 発行（手書き） 書き手 大須賀 鈴木美登里	<p>「松本刑務所慰問に参加して」</p> <p>遠くに北アルプスの雪の峰々を仰ぎ見て、（中略）保護司会の皆様と合同の施設慰問に参加させて頂きました。（中略）松本少年刑務所は 50 年の歴史があり、現在は 300 名余の受刑者が収容されているそうです。</p> <p>特に他の施設には例を見ない行刑施設内の中学校と高校通信制課程がおかれ、全国から義務教育を終えていない受刑者や、高校卒業希望の受刑者が集まって教育を受けているとの事でした。見学时、白髪も見えるような受刑者が学生服を着て、授業に臨んでいる姿も見受けました。</p> <p>地元の方々の温かいご支援もあるそうです。（中略）一日も早く若い受刑者が出所され、長い人生を悔いないものにされていくように願ってやみません。</p>
3	更生保護 婦人会だより 33 号 平成 6 年 9 月 14 日 発行（手書き） 書き手 掛川 石野文子 （保護司）	<p>「非行少年に関わっておもうこと」</p> <p>戦後半世紀が過ぎ、家長を柱とした日本古来の家族制度の崩壊、民主主義、男女同権、経済成長、女性の社会進出、核家族化、高齢化社会、青少年の非行等など数々の言葉と共に世は移り 50 年近く経ちました。（中略）今年国際家族年です。真の家族の有るべき姿とはどういうものか、今一度考えることも大切ではないでしょうか。今や暮らしが豊かになり、自分の部屋、自分の電話で快適だと思っていたことが実は非常に危険で子供にとっては駄目なことで、高校生の娘さんが非行化して相談に見えられた人の述懐です。</p> <p>かつては、貧しい家庭や崩壊した家庭の子供が非行を犯すことの多い時代があったが、最近では実母率 70%、家庭経済状況は 90%以上が普通家庭の青少年と聞きます。私が保護司に就任した 10 年前には成人の対象者が殆どだったのに比べここ数年は青少年の対象者ばかりです。（中略）</p> <p>私達は先ず、自分の足許から青年達に努力する目標、生きる目標や理想を自分の生きる姿を通じて人間の基本的モラルといったようなものを、家庭の中で、又仲間の中で、地域の中で、お互いに自分たちの努力・行動を通じて確認し合って行きたいものです。</p>

4	<p>更生保護 婦人会だより 35 号 平成 7 年 8 月 1 日発行（手書き）</p> <p>書き手 大東 安藤いと子</p>	<p>「社明運動に参加して」</p> <p>社明運動の先駆け、7 月 2 日（日）の午後 3 時より、ピアショッピングセンターにおいて約一時間保護司さんのご指導のもと、啓発活動に参加させていただきました。買い物をお済ませしたお客様に、「こんにちは、社会を明るくする運動です、是非読んでください」の掛け声に、「どうもすみません」と笑顔で受け応えてくれるお母さん、「大変ですね御苦労さま」というおじいさんとおばあさん。一方、横をむいたまま「うるさいな」と言わんばかりに足早に過ぎ去っていく方。貧しい心にだけはならないで、もう少しゆとりをもって、等等、自分なりに直感しながら様々な受け止め方に接することが出来ました。（中略）常に寛大な心の持ち主でありたいなと痛感しました。素直で純粋な子供達の心に犯罪と言う悪魔がしのびこまないように、皆さんで温かく見守ってあげようではありませんか。（中略）</p>
5	<p>更生保護 婦人会だより 35 号 平成 7 年 8 月 1 日発行（手書き）</p> <p>書き手 掛川 石川ツヤ</p>	<p>「少年の家を訪ねて」</p> <p>（中略）9 時市役所を出発、一路、勸善会へと走りました。金原明善が全国に先駆けて静岡の常光院境内に設立、刑期が終わっても、引受人の無い者を保護善導し、再犯の防止に努められ今日に至るとの事、（中略）食堂・娯楽室等、清潔整頓が守られ、掃除が行き届いており好感が持てました。時に食事は少ない費用での献立、調理員の労苦がしのばれました。勸善会を後に、少年の家に向かう。（中略）入居者の部屋を巡回、若者の部屋らしく着るもの、雑誌等、あどけなさが残っている面の伺われる。心の中の僅かなスキが非行や犯罪を招き、結果として自分自身を傷つけてしまう年頃。周囲からの温かい思いやりと適切な助言は何より大切であると思いました。（中略）</p> <p>佐々木夫妻の熱意あるボランティア精神には頭が下がる思いでした。非行に陥った少年たちの良い友達となり、悩みや喜びを共にしたり、相談に乗ったり、自ら立ち直る様、側面から指導されて、労苦が察させられました。入所者の一日も早く自立できるよう祈って止みません。</p>
6	<p>更生保護 婦人会だより 36 号 平成 7 年 12 月 18 日発行（手書き）</p> <p>書き手 大東町 縣二三江</p>	<p>「更生保護大会に参加して」</p> <p>清水市民会館で行われた第 42 回更生保護大会に出席させて頂き、身のひきしまる様な緊張を感じました。各部門での表彰者の方々が、長い人生の道のりを、ひたすら社会の福祉にたずさわって来られた業績は、そのまま風格に表われていると思いました。（中略）</p> <p>人生経験の豊かな方々と同じ会場に自分が居ると言うことだけでも素晴らしい感動を覚えました。これを機にもっともっと勉強し、力を注いで参りたいと思います。</p>
7	<p>更生保護 婦人会だより 37 号 平成 8 年 12 月 1 日発行（手書き）</p> <p>書き手 大須賀 勝田喜代子</p>	<p>「駿府学園を訪問して」</p> <p>私達更婦は、保護司の先生方と一緒に学園を訪問した。「こんにちは」と次々にすれ違う子供達の明るく礼儀正しい挨拶に、どうしてここに居なくてはならないのかと、胸が痛くなる思い。幼児の頃から家庭での愛情が乏しい故に大人に対する不信任、社会への反抗から目先の楽しみだけを求め、その結果悪に染まり非行に走る。（中略）今まで自分の事を誰からも心配などしてもらえなかったのに、ここの園では真剣に自分の事を考えてくれる。温かな指導が成長を導き巣立つことが出来る。折角この世に生を受けてきたのに、親の都合や身勝手に、寂しい人生を送ってほしくない。一針一針の思いを込めて縫ったお雑巾を使ってもらった時、私達会員の愛を受けとめてもらえることを信じて園を後にした。</p>

8	<p>更生保護 婦人会だより 37 号 平成 8 年 12 月 1 日 発行（手書き）</p> <p>書き手 大東 大石ふさ子</p>	<p>「県立三方原学園を訪問して」</p> <p>私達大東町の更婦は会員 23 名と役場の職員 2 名で三方原学園を慰問しました。この施設は児童福祉施設でいわゆる教護院で、温室・プール・農場・遊歩道・教室・体育館・親子訓練棟を備えています。寮生は一棟ずつ一つの家族として、父母に当たるご夫婦の職員を中心として起居を共にして和やかに過ごされています。少年刑務所とは異なって開放型ですが、非社会的な行為をした子供達が、癒しながら、やる気を起こさせることが第一と、父母役の職員やその家族も共に混じって 1 つの家族として過ごせるように気を遣っておられました。このようにして平均 1 年位で家に帰ることが出来るので、地域に戻ったら温かい目でみるのが、私達更婦に率先してできる仕事の一つだと思いました。（中略）</p>
9	<p>更生保護 婦人会だより 38 号 平成 9 年 3 月 15 日 発行（手書き）</p> <p>書き手 大須賀 鈴木 秀</p>	<p>「駿府学園誕生会に出席して」</p> <p>12 月 17 日学園の誕生会に大須賀町更婦が参加させて頂きました。初めてでどのように対応すればいいのか分からないうちに学園に着きました。（中略）先生がお二人、先ず自己紹介に続き、君たちの将来の夢を何でもよい、話してごらんとすると、積極的に「僕はお父さんの運送の手伝いをする」「僕はタレント」「明るい家庭をつくりたい」「トラックを買ってトラック野郎のように走りたい」様々な夢、希望を話してくれました。本当に素直な子供達でどうしてここにいるのかと不思議な位でした。もう 2 度と学園に戻って来はいけないよと心の中でつぶやき、一日も早く更生出来ることを祈って学園を後にしました。</p>
10	<p>更生保護 婦人会だより 38 号 平成 9 年 3 月 15 日 発行（手書き）</p> <p>書き手 大東 鯨 芳子</p>	<p>「西小笠地区保護司会・更生保護婦人会合同 新年研修会に参加して」</p> <p>新年を迎えてまだ正月気分もぬけきらぬ 1 月 23 日、御前崎観光ホテルにて自主研修会が行われました。保護司制度の見直しについて紹介があり、続いて講演会があり、応声教院第 55 代住職の浅井先生の「施しの心」を拝聴し、感動しました。（中略）共生共存する現在の中で、人として生きる真理に迫る鼓動を実感しながら夜の懇親会に参加しました。これからも、婦人の立場、母の立場から、傷ついた人達に対して幅広い援助活動を行って犯罪や非行のない住みよい地域づくりを目指したいと思います。</p>
11	<p>更生保護 婦人会だより 40 号 平成 9 年 9 月 25 日 発行（手書き）</p> <p>書き手 掛川 岡田淑子</p>	<p>「小田原少年院訪問記」</p> <p>更婦に加入させて頂いているものの毎年会費を納入するだけで何も協力もしていないことに心苦しく思っていたところ、少年院訪問の御誘いを受け参加させて頂きました。（中略）「少年院で学ぶ若者達の手記」を購入して読んでみました。どの子の手記からも親を悲しませた事への後悔の念が伝わってくるのです。親の悲しむ涙に「すまない」「申し訳ない」との思いが甦ってくる過程が手に取るように分かります。この思い、この心情を持ち続けて出院後、人として成長して行ってほしい。再入院等決してしないようにと願わずにはいられませんでした。</p> <p>少年院訪問後の 28 日、神戸の中学生逮捕のニュースが流れ、その後少年法の問題が世論にまき起きました。どのような改正になるかは分からないのですが、私達に今できることは、家庭で、地域で、犯罪を起こすような子供達を育ててしまわない努力をすることではないでしょうか。心の教育、再認識していきたいものです。</p>
12	<p>婦人会だより 40 号 平成 9 年 9 月 25 日 発行（手書き）</p>	<p>「裁判所傍聴に思う」</p> <p>研修の 1 つとして掛川の裁判所の傍聴を致しました。当日の法廷ではスピードを出し過ぎて道路横断中の歩行者 2 人を跳ね、1 人が死亡、1 人が重態という大変痛まし</p>

	<p>書き手 大須賀 清水久美子</p>	<p>い交通事故の裁判。被害者は横断歩道を歩いていたこと、加害者はスピードを出し過ぎていたこと等、事故はいつ起きても不思議ではなかったともいえます。常日頃、この位はいいだろう、自分は大丈夫だと思っははいないでしょうか。心のゆるみが将来悔いを残すことになりかねないと思います。母として、主婦として、忙しい日々を送る私達ですが、家庭内の気配りは、忘れてはならない大事なことと感じました。</p>
<p>13</p>	<p>更生保護 婦人会便り 47号 平成 12年 8月 20日 発行 (パソコン) 書き手 掛川 鈴木敏子</p>	<p>「塀の中の生活 見聞記」～支部視察～ 梅雨の真っ只中の 6月岐阜刑務所を訪問致しました。車中で石川ツヤ様より「刑の重い受刑者が収容されている」と伺い緊張しました。岐阜市街から大分離れた郊外で異様に高くぶ厚いコンクリートの塀に囲まれた施設で、前庭に樹木はあっても花一輪もない刑務所特有の冷たさに一寸身震いしながら玄関に招かれ無口で研修室に通されました。ビデオによる施設概要の説明を頂いて後に受刑者の服従見学を致しました。無口無表情で黙々と労働しており、部屋も整理整頓されています。(中略) ここには、刑期 8年以上、強盗殺人等で無期懲役者 101名、国費の出費も大変なものだと感じました。596人の受刑者の内、50歳代が 237名、次が 30代が 153名と多く、壁と塀の中で人生は誠に寂しいが、罪を償うというのはこのような事だと思いました。(中略) 帰りの車中、ふと受刑者の家族の事が気になりました。子供や孫は正常に育っているだろうか?と。受刑者の作品の御盆を購入してきましたが、箱から出して使う気にはなれずにいます。21世紀が平和で豊かな国になることをお祈りしながら記しました。</p>

記録者 掛川地区更女会会員・元会長 戸塚久美子